

目次

古代の音韻現象——字余りと母音脱落を中心に——	毛利正守	3
母音連続の融合と非融合——今後の課題——	柳田征司	29
上代漢字文研究——「言」をめぐって——	白藤禮幸	64
明治期落語速記の表記	野村雅昭	88
語形変化に関する一問題——アラタシ(新)からアタラシ(新)へ——	山口佳紀	125
『捷解新語』における「オシラル」の変容	林義雄	146
読本に見られる和語語彙造出の方法——曲亭馬琴を中心に——	鈴木丹士郎	160
格機能の弛緩	北原保雄	182
擬音語・擬態語の変化	山口仲美	200
対馬方言書『日暮芥草』について	迫野虔徳	226
“黒猫”の言語文化史	前田富祺	247
日本語研究会の記録		264
あとがき		270

れであつて散文の脱落とは距離があり、脱落形をも伴う字余りは、あくまで右に述べる意味においてであるが、散文とも一脈通じるところがあつたと捉えてよいかと考えられる。

(注1) 句中の母音が字余りを生じている場合は、その母音は一つの音節として存するのではなく、前の音節と一緒になつてその全体で一つの音節を形成しているので、その母音を常に母音音節と称することは差し控えねばならない。

(注2) 橋本進吉「国語の音節構造と母音の特性」『国語音韻の研究』

(注3) 詳しくは拙稿「萬葉集に於ける単語連続と単語結合体」(『萬葉』100号、昭54・4)など参照。

(注4) 以前、「二体、単語結合体の状態にある字余りからは更に縮約がみちびかれやすいと言つてよい。結合度が高まれば高まるほど縮約の現象は起こりやすいからである」(拙論「萬葉集における縮約現象——「有リ」の場合——」『国語と国文学』62巻9号、昭60・9)等と述べたことがある。この発言は、ニアリとナリ、テアリとタリなど字余り形と脱落形(縮約形)の両形を持つものを念頭において述べたところであり、また、実際、単語結合体の状態から更に縮約がみちびかれやすいということは確かであろうが、単語結合体の状態にある字余りのうちでも、和歌ゆえに起こる臨時の字余りかとみられるA群のみのそれは縮約を起こしてはいない。よつて、字余り全般が縮約をもつのではないことをここで改めて明記し、自らの考えとしたい。

母音連続の融合と非融合

——今後の課題——

一、はじめに

沖縄宜野湾市を中心に活動していたグループ、ネーネーズの曲に「テーゲー」(上原直彦作詞知名定男作曲)という曲がある。

テーゲー小ヤサ テーゲー／テーゲー小ヤサ テーゲー／物事ちやつさ 思いつめたつて／何いる事どう
何いるむん／風の吹くまま 気の向くままに／生きて 生きてみたいのさ(下略)

と歌う。大分前のことになるが、筑紫哲也氏のニュース番組を見ていたら、ネーネーズが出演しており、グループのリーダーで作曲を担当する知名定男氏が「沖縄の人たちはテーゲー主義なのだ」と語っていた。一、二曲歌った後、筑紫氏が知名氏に基地のことをどう考えていますかと尋ねたところ、知名氏が「沖縄の者はテーゲー主義ですから」とだけ答えていたのが印象的であつた。この「テーゲー」ということは、「ロックに島唄ラップにレゲエ」(アメリカ通り)と歌う「レゲエ」などを連想したりすると、どこか外来語のような響きをもつけれども、「大概(タイガイ)」の転化形と見て間違いないであろう。

柳 田 征 司